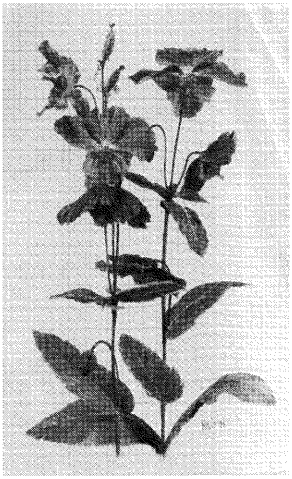
ブルーポピーがひらくとき

河野　優子

ヒマラヤの高地に咲くという青いケシ、ブルーポピーを初めて見たのは、ヒマラヤ植物の写真集でした。可憐な風情は、心を惹きつける魅力をもっています。ブルーポピーは通称で、学名はメコノプシス、メコンは「近似種」、オプシスは「ケシ（ポピー）」という意味で、探検家であり植物学者でもあるF・キングドン・ウォードが名付けたそうです。キングドン・ウォードは、数十種あるメコノプシス属のうち、メコノプシス・ベトニキフオリア・バイリイだけをブルーポピーと呼んでいます。一般的には、メコノプシス・ホリデュラ、メコノプシス・シンプリキフオリアなど、青い花をつける種が多くあり、ブルーポピーと総称されています。

趣味の一つが園芸で、凝り性の主人は、写真集や関連書籍を集め、ブルーポピーについて調べ始めました。そして種を探しているうちに、イギリスの種苗会社からブルーポピーを専門に育てている研究所兼植物園を紹介されました。スコットランドの小さな村にある研究所です。早速手紙を書いて種を取り寄せたのはもちろんですが、出張で渡英した際に訪問したり、日本にしかないという為朝百合の球根を寄付したりと、花を通して研究所と交流も深めました。百合が咲いた時には喜びにあふれた知らせが届き、花を愛する心で結ばれたご縁を、嬉しく思いました。香りが研究所中に広がり、村の人にも愛でられたそうです。そこは宿泊した日本人は主人が初めてという鄙びた村で、ホテルでの食事の時など、ミス・マーブルのセント・メアリ・ミード村を思わせるようなご婦人たちの会話があったとか。ブルーポピーは村の花でもあり、あちこちに咲いています。ヒマラヤがブルーポピーの故郷とすれば、そこは第二の故郷なのかもしれません。

さて、念願の種が手に入りましたが、ブルーポピーの種は、ヒマラヤの極寒の地で冬を越し、春に発芽します。日本で種を蒔く場合には、その前に厳しい寒さにあわせ、冬を感じさせてやらなければなりません。二ヶ月間冷蔵庫に入れるといいと聞き、我が家も小さな冷蔵庫を用意して「冬」をすごさせました。生命が芽吹き、成長する春を



迎えるためには、厳しい冬の時が必要だということを知り、小さなブルーポピーの種に大事なことを教えてもらったと思いました。

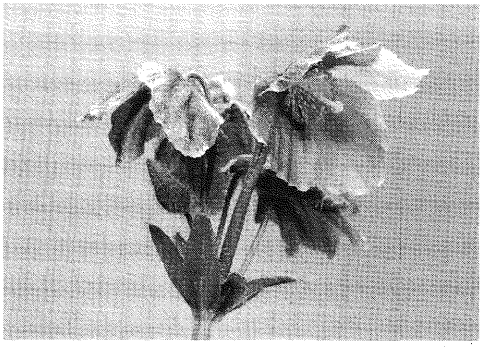
双葉が出ると、立ち枯れ病に気をつけなければなりません。発芽する時に地表にあるフザリウムという菌に侵されてかかる病気で、茎が黒ずみ折れてしまいます。予防するために殺菌剤などの薬剤も使用されますが、植物も枯れてしまうことがしばしばあり、なかなか効果は上がらないそうです。そこでよく用いられるのが、Tという薬です。これは、植物が本来持っている力を活性化させ、それによって菌に負けずに生長する力を育てようとするものだそうです。無菌状態にするよりも、本来の生命力を養うのが大事ということなのでしょう。抗菌・除菌製品ブームに象徴されるように、本質的なことよりも外側の環境を整えることに目が向けられがちな現在、考えさせられる問題です。

本葉が出る頃には植物の生命力も強まり、立ち枯れ病の心配はなくなります。が、ヒマラヤと東京では環境の差が激しく、ここからが、ブルーポピーについてより深く学びつつの、模索の時期になりました。

ブルーポピーは気温が二十度以上になると枯れてしまいます。そのため、一年目は冷蔵庫に入れて育ててみました。が、失敗。ブルーポピーは冷涼湿潤の気候を好むことを知り、二年目は冷蔵ショーケースを用意して中に加湿器をセットしました。が、なかなか育ちません。いくら冷涼で湿潤であっても、冷蔵庫の空気では自然の風とは根本的に違うのでしょう。「花は野におけ」、やはり自然の中で育つのが花にとっては一番幸せなのかもしれません。そう思う一方で、育てる以上は花が咲くように最善を尽くすことが花の幸せにつな

がるのでは、などと考え、様々に思い迷いました。

花を愛することと育てることの意味を考える中、メコノプシス・ベトニキフォリア・バイリイと、新種のメコノプシス・GS600の苗が一本ずつ残りました。こちらの迷いを吹き飛ばしてくれるような自然の生命力です。感謝しつつ迎えた三年目ですが、幸い、新居に移ったので屋上の温室が使えるようになりました。エアコンの気温を二十度に設定し、温度計のついた加湿器を設置、さらにタイマーつきの散水器で一定時間ごとに水を撒くようにするという主人の徹底ぶりでした。散水器のおかげで、花の様子を見に行き、時ならぬ雨に濡れたことも一度ならずあったそうですが……。文明の利器をフルに活用した温室ならぬ冷室は、ブルーポピーにとっては快適な空間になったようです。二本の苗はすくすくと育ち、三年目にして初めて蕾をつけました。



▲新種のメコノプシス・GS600

花がひらいていく様子を見たいとは思いましたが、花にとっては一番大切な時期です。我が家にはカブトムシやクワガタムシの幼虫もいますが、羽化の瞬間は衝撃を与えないように、そっとしておかなければならないそうです。成長や変化が起

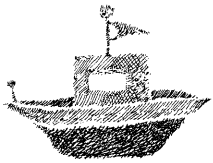
きる時には、見守ること、待つこともまた必要だと感じさせられました。

花がひらいたときの感激は、忘れることができません。可憐な、透き通るような、ふれたら壊れてしまいそうな儚げな花です。周囲の空気まで透明になるようで、ヒマラヤの山中にひっそりと咲く様子が目に見える気がしました。

ブルーポピーを育てて、初めて「一稔性」という言葉を知りました。数年かけて生長し、花を咲かせて生涯を終える、つまり稔りは一度だけ、という意味だそうです。

三年がかりで咲かせたブルーポピーも、花は数日の命です。でも、潔いからこそ美しいのかもしれません。花がひらいたのは大きな喜びですが、ひらくまでにすごした日々もまた、愛しく、大切に思われます。

三年目に蒔いた種も発芽し、四年目の夏を無事に越しました。が、秋になって戸外の涼しい風にあてようと屋上に出したところ、一夜にして都会のカラスにつつかれてしまいました。ブルーポピーはヒマラヤの清浄な地に生育しているので薬剤や化学肥料に弱く、我が家では天然の酵素だけで育てていました。育てられる植物にも育てる人にも優しくと考えて育てた柔らかい苗は、恰好のご馳走だったのかもしれないと、驚きや悲しみの一方で考えました。



五年目の今年は諦めていた種から芽が出て、新たな希望を感じさせてくれます。

ブルーポピーを育てていると、思いがけないことが次々と起こり、そのたびに、多くのことに思いを馳せます。研究所との交流も含め、花を育て

ることで心がひらかれたようにも思います。これからも真摯に向かい合い、学びの時にしていきたいと思っています。

（立教女学院短期大学）

「ひらけ、ゴマ！」

―私の異文化体験記・シリアの幼稚園にて―

小山　祥子

誰でも一度はこの呪文を耳にしたことがあるのではないでしょうか。ご存知のように、これは中世イスラーム世界に住むアラブ人が語り継いできた物語「アラビアン・ナイト」の中の「アリババと四十人の盗賊」に出てくる言葉です。この話の中では「ひらけ、ゴマ！」と唱えると、大きな岩